

結婚披露宴が終わった後、横浜から来てくださった長崎源之助氏を、打ち上げの食事に誘ったのだが、前日から風邪で、体調が良くないとのこと。食事会の方は遠慮されていた。翌日、家内が宿泊されているホテルに電話を入れ、飛行機の間をお聞きすると、ゆっくり時間をあつたので、「今から先生を迎えに行つて、空港まで送ります」と電話口で家内が言い、「ね、良かる？」と私を見たので、「いいよ」と言った。

小学校の国語の教科書に作品が載っているような、偉い先生を乗せているんだと思つと、私は少しばかり緊張して、ハンドルを握っていた。後日になるが、やはり今回と同じように空港へ向かう途中で、「つりばしわたれ」という作品について「あれはそんなに苦労して書いた作品ではないのだけれど、僕の作品の中では、一番の稼ぎ頭になったなあ」と、作品ができたいきさつを、お聞きしたことがあった。ある企業広告の冊子に載せるということ、執筆依頼があったそうだ。

「とても物分りのいい企業だね。何の条件も付けずに、好きなように書いていいって言

空港まで

土地家屋調査士

田口 一法さん



「言ひよ、」と、「そつ、そつ」と、氏はなおさらにつれしそつな顔をされた。

空港でゲート越しにお別れをしたが、そのときの様子を氏が出しておられる随筆集の中で、「お幸せに」という題にしてまとめておられる。一流の人の文章と、私のそれとを一緒に並べると、文章のつたなさが目立ってしまうが、引用させていただこう。

「前半略…、空港についたとき、もつこで結構だというのに、搭乗口まで送ってくれた。私が搭乗者待合室に入っても、二人は立ち去らなかつた。邦子さんが何かいったが、ガラス越しでは、全然きこえない。手できこえないと合図すると、邦子さんはポケットから薬袋をとりだし、その裏にボールペンを走らせた。彼にもかけたと思ったらしく、彼も何かかいた。それをガラス越しに見せた。

「どうもありがとうございまして。おからだを大切にしてください」

田口君も同じようなことがかいてあった。

私も、医者からかぜ薬をもらっていたので、オーバーのポケットから薬袋をとりだし、その裏にかいた。「お幸せに」と。

それを見ると、邦子さんは大きくうなずいて、にっこり笑った。(よこはま文庫の会報N 0100)

(熊本市花園、47歳)

うんだ。何の条件も付けないけれど、一つだけ条件を付けて、その企業のイメージに合う作品を書いてくれっていいんだよ。その企業のイメージというのが、『スカッとさわやか、なのを書いてくれ』って。何という会社か分かるだろう？」。氏はつれしそつにおっしゃった。そのキャッチフレーズも、今はあまり聞かなくなつたなあと思ひながら「あの有名な某清涼飲料水の…」私が